

秋の教養講座 2020

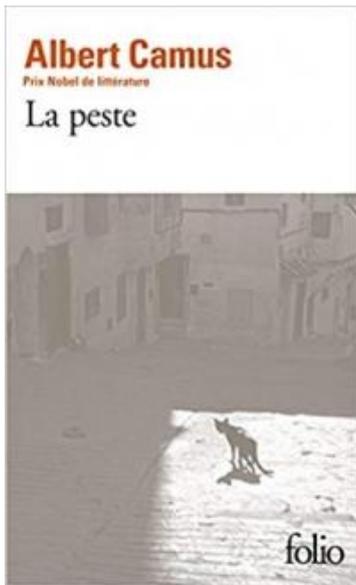
講演「カミュ『ペスト』を読む」

11月23日(祝・月) 奈良県文化会館小ホールにて開催

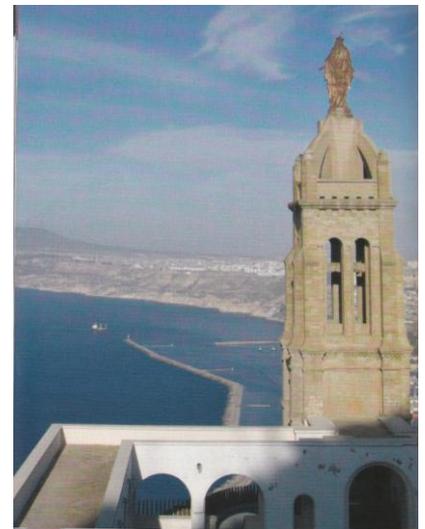
講師 三野博司(奈良女子大学名誉教授) 会長

奈良日仏協会の「教養講座」も今年で11年目になります。2009年、坂本成彦第4代会長の時代に始まり4回開催されたあと、2014年に私が第5代会長に就任後、まず奈良女子大学において、次に2015年-2019年は、放送大学奈良学習センターとの共催の形で行いました。そして、今年、コロナ禍のため奈良女子大学およびその構内にある放送大学奈良学習センターは学外者入構禁止となり、奈良県文化会館へと会場を移すことになりました。

放送大学は、BS232チャンネルにおいて通常の放送授業を行うほかに、BS231ではさまざまな文化・教養番組を放送しています。このなかには、全国50か所にある学習センターの所長が退任後に担当する「スペシャル講演」(45分番組)があります。2020年3月、所長を定年退職した私にも依頼が来ました。ちょうど奈良日仏協会において、この秋の「教養講座」を引き受けることになっており、そこで今回は「教養講座」+「スペシャル講演」という形で開催します。



テーマは「カミュ『ペスト』を読む」です。たまたまパンデミックの時期にあたり、今年この小説は世界中で話題の書物になりました。私もこれまでに、国際カミュ学会の機関紙が特集を組んだのを機会に寄稿すると同時に、国内でも毎日新聞大阪本社、NHKラジオ全国放送、朝日新聞東京本社から取材を受け、『ペスト』について語りました。



オランの海岸(アルジェリア)

今回の講演の特色は、対話劇を含むことです。『ペスト』は疫病と闘う男たちの物語(女性はほとんど登場しません)ですが、その男たちが災禍と闘うことの意味や、個人の幸福と公共の福祉、神による懲罰と人間の誠実さ、などについて議論します。それを三つの対話劇にまとめました。原文は直接話法、間接話法、自由間接話法が複雑にまじりあっていますが、それをすべて直接話法で訳して台本を作りました。この対話劇を軸として講演を展開したいと考えています。

日時 ：2020年11月23日(祝・月)	主催 ：奈良日仏協会、放送大学奈良学習センター
会場 ：講演会：15:00~16:45(開場14:30) 奈良県文化会館小ホール(参加無料、但し要申込) 懇親会：今年度は中止します。	
参加申込先 ：11月17日まで。 tel 090-6322-0672(杉谷)	メール sugitani@kcn.jp(杉谷) fax 0742-62-1741(三木)

※詳しくは本号同封のチラシをご覧ください。

第 145 回 フランス・アラカルト (7/11) : 「登大路ホテルでの昼食会」

◆◆◆7月11日(土)、登大路ホテル奈良での昼食会に、定員いっぱいの15名の皆様にご参加頂き、誠にありがとうございました。コロナウィルス感染症の拡大状況や行政の動向等に気をもみながらも、何とか開催できてほっとしたことを、思い起こします。また感染予防対策として、当日の受付ご担当の皆様には、体温測定にアルコール消毒と大変ご協力賜りましたこと、深く感謝申し上げます。お陰様で、開催後14日経過の間もあまり心配せずに過ごすことができ、そして何より何も起こらなかったことで、この行事が成功裏に終わったと実感できた次第です。総料理長の仙石もこの時期に来て頂ける「感謝」を込めて調理にあたらせて頂きましたが、みなさまにお楽しみ頂けた様子に安堵致しております。当分コロナ問題は続くと思いますが、奈良日仏協会の会員のみなさまのご健勝を祈念申しあげ、またお目にかかれる日を、仙石ともども楽しみに致しております。三野会長乾杯の挨拶にありましたように、「コロナに負けず」頑張ってください。(上野正暢 登大路ホテル奈良総支配人)

◆◆◆コロナ禍、開催が難しいのではと思っていましたが、キラキラの銀色のお皿にバランス良くのった前菜が優雅に運ばれ、お食事会が始まりました。食事会どころか、外食の機会も減っていたので、給仕されるのも久しぶりです。席は、くじ引きで決まるので盛り上がるのか少し心配しましたが、そんな心配は全くありません。ズッキーニやとうもろこしなど、季節を感じる料理の美味しさと、フランス話に花が咲き、あつと言う間に時間が過ぎました。最近では、慣れない新しい生活様式を手探りする日々でしたが、久しぶりにゆったりとしたラグジュアリーな時間を過ごせました。やっぱり、美味しいものを時間をかけてゆっくり堪能するのは最高です。(今西絵美)

◆◆◆7月になってコロナ感染者数が少しずつ増加する中での開催とあって、まず受付で検温と両手の消毒済ませ、くじ引きで引いた番号の指定席につきました。支配人のご挨拶の中に、「ここからは見えませんが、室内の換気には十分に気を配っております」とのお言葉がありました。メンバーはすべてマスクをつけての挨拶、大きな声はださず、食事時はマスクをはずし、おしゃべりはマスクをつけて。このような所作は、全員初めての体験でした。食卓ではなく、テーブルから少し離れた場所に設置されたスタンドマイクで、会員各自の個性あふれる近況が話されました。食事のメニューは、前菜、スープ、魚、特選牛フィレ肉のグリエの赤ワインソース、西洋わさび添え(わさびが良く牛にマッチしていました)、トウモロコシのガレットと広陵茄子のサラダ、デザート、コーヒーと小菓子。とても美味しくいただきました。2020(令和2)年はなんという年でしょうか? まだまだ続くウィルスの脅威に、地球全体が翻弄されています。ワクチンの早い製造を望むばかりです。わたくしたちにできるのは、外出をひかえ、手洗いなどに気を付けることでしょうか。それでも、これからの未来に期待したいものです。(井田眞弓)

◆◆◆開催前の心配はすべて杞憂に終わりました。というのも、総支配人の上野さんはじめとするホテルのスタッフ一同の皆様が、万事ゆきとどいた心配りで、私たちを暖かく迎えてくださったからです。困難な状況だからこそ最善を尽くして、もてなしてくださったホテルの方たちの「プロの仕事ぶり」に、感銘を受けました。一皿一皿、仙石料理長の季節感のある洗練された料理を堪能しながら、心地よく食事を楽しむことができました。美味しい料理を味わえるのは人生の喜びです。久しぶりに顔を合わせた会員それぞれの近況報告も楽しかったです。お互いのステイホーム中の出来事を話したり聞いたりすることで自然に心が和み、お料理に味わいが増したような気がします。日仏協会会員でもある上野さんの、「将来AI(人工知能)が人間の仕事を代用する時代がくると言われているが、お客様の気持を汲みとって細やかに対応しなければならないホテルマンの仕事は、AIが代替することのできない仕事のひとつに挙げられていてほっとした」とのお話が、印象に残りました。(浅井直子)



第54回奈良日仏シネクラブ例会 (7/26) 『海辺のポーリーヌ』(1983) 報告

◆◆1985年、日本で公開される最初のロメール作品として『海辺のポーリーヌ』が映画館のスクリーンに登場したあと、その後ビデオでの紹介も含めて、2000年までの15年間、ロメールの旧作・新作が次々と私たちを楽しませてくれました。1990年代の終わり、奈良女子大学で定期的におこなっていたフランス映画上映会で、ロメールの4本立てを特集したこともありました。とはいえ、「若い女の子がひたすら恋についてしゃべるだけの映画のどこがおもしろいのか」と、たずねた学生もありました。ピエール・シルヴェストリさんが『Mon Nara 6月号』の紹介文に書いていたように、ロメール作品には、マリヴォーやミュッセに代表されるフランス恋愛心理劇の伝統が感じられます。いかにもフランス的といえますが、ここが好悪の分かれるところかもしれません。『海辺のポーリーヌ』ではさらに、部屋に隠れた愛人の入れ替わりが、ポーマルシェの『フィガロの結婚』のパロディにもなっています。また、海辺のヴァカンスでの少女の体験というストーリーは、コレット『青い麦』やサガン『悲しみよこんにちわ』(ともに映画化されています)を踏まえているでしょう。とはいえ、ポーリーヌは、ヴァンカやセシルほどの体験をするわけではなく、ヴァカンスが終わればあとにはほとんど何も残らないでしょう。久しぶりに見た映画ですが、このほとんど事件らしい事件が起こらないひと夏の体験、それがいいのですね。(三野博司)



◆◆夏といえば海に泳ぎにいった時代が、はるか昔のように感じられた今年の夏。映画を通じて、80年代フランスの海辺の雰囲気、しばしの間ひたりました。主人公の少女が車で別荘に到着して、庭の扉を開ける場面に始まり、ヴァカンスを終えて同じ扉を閉める場面で終わるこの映画、「庭の扉」が「カーテン」の役割をしている「舞台劇」であることが、わかりやすく示されます。じっさい、複数の男女の登場人物が、「恋愛」についての自分の考えを率直に語り、行動し、また語るという「台詞劇」が展開します。言葉が、思わぬ誤解を生じさせて、主人公の少女は傷つきますが、彼女は自ら行動し誤解を解こうとします。その過程で、想っていた少年の誠実度に失望も感じつつ、自分とは異なる恋愛観をもつ人々の存在を受けとめながら、自身の考えをはっきりと表明するに至ります。とどのつまり内面的には何も変わらない人物たちとは対照的に、繊細な彼女の内面では変化が生じています。そのドラマは、外面的には特別なことに見えず、誰しもが経験するようなありふれたことかもしれません。それでも本人にとってはとても大事なことに違いありません。ひと夏の経験をいかにもドラマチックに描いて、容易にカタルシスがもたらされる映画とは対照的に、ロメール映画は、紋切り型の台詞と感性に響く台詞とが入り混じって喜劇の様相を呈しながらも、ひとりの人間の考え方や生き方へのリスペクトが感じられるところが、魅力的です。ノルマンディーの鄙びた海水浴場の自然の情景や室内装飾、画面構成や色づかいへのこだわりも見逃せません。(浅井直子)

第55回奈良日仏協会シネクラブ例会案内 (10/25) 「冬物語」(Conte d'hiver, 1992, 110 minutes)

Conte d'hiver commence avec des images d'été, celles de l'idylle entre Félicie et Charles. Le cœur de celle-ci est depuis lors resté fixé sur ces images, bien qu'elle ait une liaison avec son patron Maxence. En effet, Charles reste l'amour de sa vie et le père de sa fille Elise. Elle quittera d'ailleurs Maxence après avoir eu une illumination dans la cathédrale de Nevers. Ce qui la ramène vers Loïc avec qui elle entretient une amitié amoureuse et dont elle se moque gentiment. Elle ne l'aime pas assez pour vivre avec lui. C'est la valse des hésitations pour Félicie. C'est le conte des transports en commun. Eric Rohmer filme en équipe légère, il lui est donc plus facile de suivre Félicie dans le métro, dans le train ou encore dans le bus. Le cinéaste a fait beaucoup de recherches afin que son film soit le reflet le plus fidèle possible de la réalité. Pour donner une touche hivernale, il a choisi de tourner sans éclat. Les couleurs sombres dominant alors que les costumes et les décors sont ternes exprès. Même la ville de Nevers lors de la première visite de Félicie est vide de monde, comme morte. (Pierre Silvestri)

『冬物語』は、フェリシーとシャルルの牧歌的な映像、夏の映像とともに始まる。フェリシーの心は以来、その残像に固着したままだが、(美容室の)店の主人マクサンスと関係を持つ。シャルルは、実際、彼女の生涯をかけた恋人、娘のエリーズの父親であり続ける。フェリシーはヌヴェールの大聖堂で啓示を受けると、やはりマクサンスと別れることにする。彼女はロイックのところに戻るが、彼に抱くのは愛情に満ちた友情で、やさしく接してもまともには相手にしていない。彼と一緒に暮らすほどの愛はない。この映画は、フェリシーの迷いの円舞曲であり、公共交通機関の物語でもある。エリック・ロメールは身軽なチームを組んで撮影する。そのためメトロ、列車、バスの中でフェリシーをたやすく追いかけることができる。映画作家ロメールは、自分の映画を、可能な限り現実の反映とするために、さまざまな工夫を行った。冬の感触をだすためにあえて華々しさを避けて撮影している。薄暗い色調が支配的で、衣装や背景に輝きがないのは意図的である。フェリシーがはじめて訪れたときのヌヴェールの町でさえも、人気がなく、まるで死んでいるかのようだ。

(会場と日時は本誌12頁参照)



第 146 回 フランス・アラカルト (9/5)「エリック・シュヴァリエさんを迎えて」

9月5日(土)、「菜宴」において、会員11名とフランス人ゲスト2名の参加のもと、第146回フランス・アラカルトを開催しました。堺の鍛冶職人のもとで約5年間修業後、堺市伝統産業会館で観光振興の仕事に携わりながら、包丁や台所用具の新しいブランドを立ち上げられたエリック・シュヴァリエさんがゲストで、会員の西野典子さんからの情報提供による企画です。コロナの跳梁はまだ続くなか、入室時検温、ソーシャル・ディスタンス確保、全員マスク着用で臨みました。鍛冶職人という仕事と作務衣姿から抱いていた予想とはまったく違って、本音を吐露したユーモアあふれたお話しぶり、笑いが絶えませんでした。高校時代に日本語に興味を持ち始め、マーケティングの大学に通いながら日本語を勉強するうち日本の歴史や文化にも興味が湧き、INALCO(東洋言語文化学院)に入り直したが、授業は厳しく脱落者が続出し友人の一人が自殺したという学生生活。来日直後はまったく会話がきかず一つ覚えのかつ井ばかり食べていたが、堺の鍛冶屋22代目佐助から翻訳を頼まれたのがきっかけで弟子入りし、HPの整備を担当、ニューヨークの写真家の紹介によりアメリカで佐助の人気が出たことや、新聞取材を受けたことからメディアの力を知った。しかし肝心の修業では身の回りの雑用や炭切りだけ、2年してようやく鍛冶場に入ったが何も教えてもらえなかったとのこと。メディアで人気が出過ぎ注文に対応できなくなった結果、修業を4年半で終え、その後全国の職人から包丁を仕入れて販売する会社を設立したが、大量生産の品も併せて売ろうとする相方と運営方針が合わず辞め、次に職人のグループの良い商品だけを販売するブランド「DeSakai」を立ち上げた。参加者からは、波瀾万丈だが、縁を活かしていい人生を歩んでこられたと、シュヴァリエさんのこれまでの紆余曲折に讃嘆する声が多く聞かれました。(杉谷健治)。



左から4人目がシュヴァリエさん

◆◆◆ 今回のフランス・アラカルトの数日前、夕方のTVの情報番組の堺特集に作務衣をきたエリックさんが登場。上手な日本語、TV慣れした対応に一瞬「チャライ人？」と思いましたが、実際お話をきくと、日本語でもフランス語でもテンポよく笑いを生む話術、人を飽きさせないサービス精神にすっかり魅了され大笑い。しかしふと冷静に考えるとエリックさんは「挫折と発想転換」の人だと気づきました。中国語習得断念から日本語との出会い、INALCOでのおごりと厳しさ、日本語を学ぶ友人との死別、3.11震災による日本旅行の断念、現在の妻となる女性との日本行き、たまたま手伝った堺刃物の翻訳、文化活動ヴィザ取得と鍛冶職人修行、メディアによる人気と実力の乖離、修行続行の断念、インバウンドコーディネーターへの転身、新ブランド DeSakai の立ち上げ。…と、文字にすると結構シリアスな状況もあったようですが、その隣り合わせにある縁とチャンスをしっかり掴んで自分のものにする強さと明るさとポジティブさが今のエリックさんの輝きなのですね。(林薫子)

◆◆◆ 講師エリック・シュヴァリエ氏は、いくつかの偶然と出会いを経て堺市へやって来た。多くのフランスの若者がアニメやマンガに Japon を見出したのとは異なり、日本語の音声に魅かれて日本に関心を持ったとのこと。高校生だった私がシャンソンで耳にしたフランス語の甘く不思議な響きに魅了されたことを思い出す。彼は刃物鍛冶「佐助」に弟子入りするも、雑用ばかりで本職の鍛冶職人にはなれなかった。しかし、その苦労が堺市の伝統産業振興に携わる前段になったのだから、体験に無駄なことはない。その日に着ていた濃紺の作務衣は、彼が包丁鍛冶の弟子だった日々を想わせた。左胸には堺の手打ち刃物の金文字、それにフランス国旗中央の白地に日の丸をあしらったエンブレムが鮮やか。質問の機会に刃物の素材となる鉄が島根県から来ていることを聞き、それが「ヤスキハガネ」であると確信した。出雲(島根県東部)は砂鉄と木炭から鉄を作る古式製鉄の本場だった。私の亡父はそれを継承する安来製鋼所(現・日立金属)を最初の職場とした鉄鋼技術者で、その点からも興味深い出会いとなった。(濱 恵介)

◆◆◆ Merci à tous de m'avoir écouté suite à l'invitation de Monsieur Sugitani et Madame Nishino, et permis de vous raconter mon parcours depuis mes débuts en langue japonaise il y a 12 ans à mon travail actuel. J'ai pour la première fois pu aborder l'ensemble de mes études et les différents sentiments que j'ai ressentis pendant ces 8 années de vie au Japon. Cette fois j'étais le conférencier mais j'espère vous revoir à nouveau, dans ma ville de Sakai ou à Nara pour écouter et apprendre à mon tour. Je vous souhaite une bonne santé et la joie quotidienne dans ce merveilleux Japon qui m'a si chaleureusement accueilli.

私の話を聞いていただいた皆さん、お声をかけてくださった西野さん、杉谷さんに感謝するとともに、12年前に日本語に取り組んでから現在の仕事に至るまでの道のりをお話しする場を設けていただいたことに、厚くお礼を申し述べます。これまでの勉強のことやこの8年間の日本での生活であれこれ思っていたことをまとめて振り返ったのは初めてで、よい機会となりました。今回は私がお話しましたが、次は堺か奈良でまたお会いして、皆さんからいろいろお話を伺いたいと思っています。温かく迎えてくれた素晴らしい日本の皆さんのご健康とご多幸をお祈りしています。(Eric Chevallerier エリック・シュヴァリエ)

「モリエールの喜劇」(6)『アンフィトリオン』(Amphitryon, 1668) 山本 邦彦

頼みの『人間嫌い』も興行的には振るわず、劇団経営に窮したモリエールが次に飛びついたのは、プラウトスの『アンピトルオ』を踏まえてロトルーが改作に成功した『ふたりのソジー』(1636)と同じテーマでした。

天界の最高神ジュピテルは、テーベの將軍アンフィトリオンの貞淑な妻アルクメーナに惚れ込み、夫の出征中に、夫に化けて彼女と同衾します。將軍の下僕ソジーが主人の間近い帰還を伝えに戻ると、門前にもう一人のソジー(実はソジーに化けた伝令神メルキュール)が立ちはだかり、一悶着。さらにアンフィトリオン自身が戻ってくるともう一人のアンフィトリオンがいて混乱は頂点に達します。最後にジュピテルが雲に乗って現れ、本性を明かし、英雄エルキュール(ヘラクレス)の誕生を予告して將軍夫婦に祝福を垂れます。

ルイ 14 世はこの当時夫ある身のモンテスパン侯爵夫人と深い仲になっていました。そのためにモリエールの『アンフィトリオン』はこうしたふたりの関係を暗に描いているのではないかという説が一般的です。だとすれば、モリエールはどのような立場に立っていたのでしょうか? 終幕「おまえが最高神たるこのわしと妻を共有するのは、決して不名誉なことではない。神々の王者を恋敵にもつとは、たぐいまれな光栄ではないか」というジュピテルの台詞を聴けば、これは国王への追従ではないかと思えます。しかしそれに続くソジーの独白「ジュピテルさまは、苦い薬を上手に飲ませるすべをわかまえていらっしゃる」を聴けば、国王の権力に対する痛烈な批判のようにも思えます。

モンテスパン夫人はといえば、その後国王の公妾として、ふたりの間に 7 人の子どもをもうけました。一方不満を口にした夫は地方へ追放される憂き目にあいます。神話から現実へのなんというこの落差!



1682 年版「モリエール全集」口絵

ホームズ物語とフランス(3)

長谷川 明子

ホームズ物語の中で「ナポレオン」(Napoléon Bonaparte, 1769-1821) が言及されているいくつかの作品がある。『赤髪組合』(The Red-headed League, 1891) では、銀行の地下金庫に眠るナポレオン金貨。『六つのナポレオン』(The Six Napoleons, 1904) では、石膏のナポレオン像に隠されたボルジア家の黒真珠。『金縁の鼻眼鏡』(The Golden Pince-Nez, 1904) では、レジオン・ド・ヌール章 (la Légion d'honneur)。『最後の事件』(The Final Problem, 1893) では、“犯罪界のナポレオン” モリアーティ教授、などなど。

コナン・ドイルは歴史小説家としての評価も高く、ナポレオン配下の軍人『ジェラール准将』(The Exploits of Brigadier Gerard, 1903) を書いているが、当然そこでは「マレンゴの戦い」(1800年6月13・14日)は勝ち戦、「ワーテルローの戦い」(1815年6月18日)は負け戦である。しかし、ホームズは『アベ農場』(The Abbey Grange, 1904)の中で、これとは正反対に事件解決がワーテルロー(勝ち戦)なのだとしている。

“We have not yet met Waterloo, Watson, but this is our Marengo, for it begins in defeat and ends in victory.” 「いずれにしてもウォーターローはまだまだだ。今はマレンゴ、まず敗れて、しかるのち勝利に終わるといふものだ。」(延原訳)

ジャック=ルイ・ダヴィッドの有名な絵「サン=ベルナル山からアルプスを越えるボナパルト」(Bonaparte franchissant les Alpes au Grand-Saint-Bernard, 1801, 右画像「ナポレオンとヴェルサイユ展」図録, 2005年, 日本経済新聞社)のテーマにもなっている「ナポレオンのアルプス越え」。イタリアに入ったナポレオンは、マレンゴの戦いに勝利し、北イタリアを征服、その後全ヨーロッパを席卷していく。フランス皇帝にまで上り詰めるが、二度にわたるロシア遠征に失敗しワーテルローの戦いでウェリントン公爵(Duke of Wellington)指揮下の連合軍に大敗する。通常の比喻ではワーテルローは負け戦、英語の慣用表現にも“meet one's Waterloo”(大敗北する)というのが辞書に出ている。が、そこはあくまでも「英国の名探偵」ホームズである。マレンゴは負け戦で、ワーテルローが勝ち戦なのである。



Nos amis francophones à Nara (15) **Retailleau Baptiste (レタヨ・バティスト) さん**

Bonjour à toutes et à tous ! Je m'appelle Baptiste et je vis au Japon depuis 2009. Après deux ans passés à Kyoto et huit sur Osaka, me voilà installé à Nara avec ma femme, mon fils, sans oublier notre chien « コロッケ »

Banal "salaryman" dans une société de négoce spécialisée dans les accessoires de mode et les loisirs créatifs, ma rencontre avec le Japon remonte à mon enfance. Outre les dessins animés et les jeux vidéo

« Made in Japan » qui ont marqué de ma génération née dans les années 80, j'ai surtout été amené à m'intéresser au Japon au travers du judo. Originaire d'une petite commune de Vendée, le dojo local était tenu par la maman de Stéphane Traineau, grand judoka français et fierté locale. Et pour cause ! Septuple champion d'Europe, Champion du Monde '91, médaillé de bronze aux JO par deux fois... Tous mes amis et moi-même, alors âgés de 7-8 ans rêvions de devenir champion à notre tour ! Ainsi donc mon enfance a été beaucoup plus « japonisée » qu'« américanisée » et c'est tout naturellement que j'ai décidé d'apprendre le Japonais lorsque j'ai eu 18 ans. Depuis ce temps, je ne fais plus de judo mais le Japon est devenu ma seconde patrie.



Nous découvrons Nara en famille petit à petit depuis Mai dernier. Nous passons notre temps à jardiner et à nous promener dans le parc Obuchi-ike. Ça fait du bien de retrouver un peu de nature et de calme après toutes ces années passées en ville !

みなさんこんにちは！ バティストです。2009年から日本に住んでいます。京都で2年、大阪で8年暮らした後、妻と息子、そして犬の「コロッケ」とともに、奈良に居を構えました。

ファッション関係のアクセサリや手芸品の専門商社の「普通の」サラリーマンですが、日本との出会いは子供時代に遡ります。80年代生まれの私の世代の特徴である「日本製の」アニメとビデオゲームの他に、特に私は柔道を通して日本に関心を持つようになりました。ヴァンデ地方の小さな町の出身ですが、偉大なフランス人の柔道家で地域の誇りでもあるステファン・トレノーの母親が経営する地方道場がありました。それもそのはず！ ヨーロッパ選手権優勝7回、91年の世界選手権優勝、オリンピックでは2度銅メダル獲得…。当時7～8歳だった私や友達のみならず、自分たちがチャンピオンになることを夢みていました！ こうして私の子供時代は、「アメリカ化」というよりむしろ「日本化」されていました。ですから、18歳の時に日本語を習うことに決めたのも、ごく自然なことでした。その時からもう柔道はしていませんが、日本は私の第二の故郷となりました。

私たち家族は、今年の5月以来、少しずつ奈良のことを知るようになりました。庭仕事をしたり、大淵池公園を散歩したりして過ごしています。都会で暮らした数年を経て、自然と静けさをとり戻しつつあります。

コラム：「ご存知ですか？」 « Connaissez-vous ? »

ヴァンデ (Vendée) 地方：北はロワール＝アトランティック県、西は大西洋に面する。ヴァンデの名はフランス史上、フランス革命の最中に起きたヴァンデ戦争で知られる。反政府派の農民（白軍）、革命政府軍（青軍）が数年間争い、多くの死者を出した。レ・サールブル＝ドロンヌの港を出発地とゴール地とする「ヴァンデ・グローブ」(Vendée Globe) は、1989年に創設された単独無寄港無補給の世界一周ヨットレースで、南半球のルートを通る世界で最も過酷なヨットレースとされる。



ステファン・トレノー (Stéphane Traineau)：1966年生まれのフランスの柔道家。階級は100kg級、身長192cm。1986年～2000年の約15年間にわたって、重量級のフランス柔道界を代表する選手として活躍。アトランタオリンピック(1996)とシドニーオリンピック(2000)では銅メダルを獲得し、世界選手権優勝(1991)、ヨーロッパ選手権では個人と団体合わせて7回優勝するなど、重量級で目覚ましい成績と存在感を残した。日本の井上康生との試合をYouTubeで見ることができる。2017年からは、フランス柔道代表チーム総監督に就任。



会員投稿

奈良県で出会ったフランスの演劇

藤井 文代

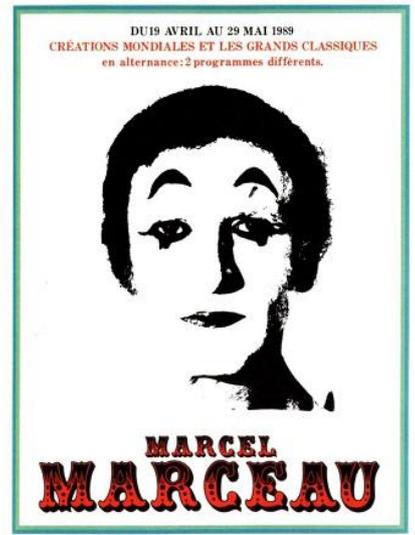
マイム芸術というのは — 人間の次々と変化していく魂の状態を伝える — 探究心と変身の芸術である。そしてまた、最も深い切望の中で、人間の宇宙論と一体化しうる、純粹かつトータルな芸術でもある。 — マルセル・マルソー —

1989年5月3日、日本公演の為、橿原文化会館を訪れていた、マルセル・マルソー (Marcel Marceau, 1923 - 2007) を観劇した。

1923年にストラスブールで生まれたマルソーは、1944年、パリのサラ・ベルナール劇場のシャルル・デュラン演劇学校に入学し、ここで、エティエンヌ・ドゥクルーという師に出会った。その後、同じ師に指導を受けた先輩のジャン＝レイ・バローのカンパニーに迎えられ、「パティスト」というタイトルのパントマイムで舞台デビューする。この役はバロー自身が、映画『天上棧敷の人々』(Les Enfants du Paradis, 1945)の中で演じた役であった。同じ年に、ベルナール劇場にて、マルソー自身の第1作の「プラクシテレスと金の魚」を上演し、マイム役者として、他に類のないパントマイミストとして、認められることとなった。

1989年の日本公演は、AプログラムとBプログラムに分けられ、橿原文化会館での公演はBプログラムで、その内容は①スタイルのパントマイムとして「天地創造」「天使」等、②ビップのパントマイムとして「ビップの子守」「自殺するビップ」「舞踏会のビップ」等。特にビップというキャラクターは、マルソーの分身ともいえる人物で、横縞シャツと頭には山高帽子のスタイル。映画出演も多く、1951年の『パントマイム』(ポール・パヴィオ監督)の際は、ジャン・コクトーが、「マイムは言葉の壁を越える」という序文を寄せている。

橿原での観劇の記憶は、今でも清々しさに満ちている。

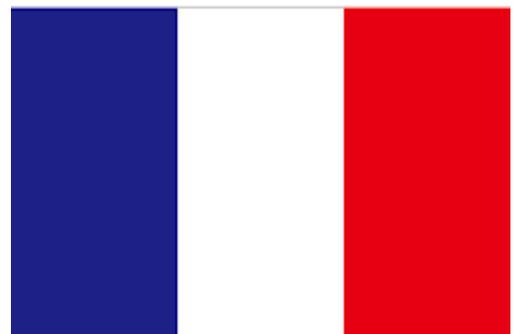


隣人愛の精神、non-assistance

角田 茂

隣人愛についてイエスが語られた有名な聖書の箇所は、ルカによる福音書10章、『良きサマリア人の譬え』である。「隣人を自分のように愛しなさい」と、イエスから言われた律法学者は、イエスに対し、「わたしの隣人とは誰ですか」と質問する。その時、イエスの語った譬えが『良きサマリア人の譬え』である。ある人が追いはぎに襲われ、半殺しの状態で道端に横たわっていた。そこにユダヤ教の指導者たち(祭司とレビ人)がやってくるが、見て見ぬ振りをして通り過ぎた。最後に通りかかったサマリア人は、その負傷者を見て、憐れに思い応急手当をし、宿屋に連れて行って介抱した。サマリア人は、当時、社会的に差別を受けていた人である。イエスはこの譬えを語り終えると、「登場した3人の中で誰が、追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と律法学者に質問をした。そこで律法学者は、初めて隣人愛の意味を理解した。イエスは自分にとって隣人とは誰かという問いかけではなく、苦難の中にある人の隣人になることができるか、という主体的決断を要求されていた。

フランスには、良きサマリア人とならなかった人を裁く法律が存在する。それは、刑法223条6項のNon-assistance à personne en dangerであり、日本語に訳すと、「危険にさらされている人に対して援助をしないこと」となる。一般的には、略して non-assistance と呼ばれている。池で溺れている子どもがいたとする。日本では、両親や担任の教師など、特別な義務を課せられている人以外に人命救助義務はなく、見て見ぬ振りをして通り過ぎても、罰せられることはない。しかしフランスでは、このような場合、共和国市民であれば、誰でも処罰の対象となる。1998年、血液製剤によるHIV感染問題では、政府の不作为に対し、ローラン・ファビウス首相をはじめ政府の要人が、non-assistance で訴えられた。ファビウス首相は無罪となったが、国立輸血センター所長には4年間の実刑判決が言い渡されている。



コロナ禍の中で

藤村 久美子

この春、私が仲間と企画していた恒例のホワイエ・ヴェールでの演奏会（右画像はそのチラシ）が迫る頃、催し物の延期・中止が相次いでいて、主催者の私は決断を迫られ悶々としておりました。周囲の「止めておいた方がいいのでは」という忠告の中、なんとかして安全に開催できないものかと考えていた時、無観客相撲のニュースを聞き、「これだ!」と思いました。無観客なら密にならない。しかし、聴衆のいない所で演奏ってどうなんだろう、やっぱりお客様を前にしてやりたい、そこでハタと気がついたのです。「15名の演奏者がいる、この人たちが同時に聴衆になればいいんだ」と。

ということで、演奏者が客席に互いに離れて座って全プログラムを聴くという、初めての演奏会が実現しました。この日の最後のプログラムは、器楽曲の中にオペラのアリアを挿入するというアイデアを取り入れた「カルメン幻想曲」。カルメン役の迫真の演技に客席は大いに沸き、警戒しながらこぎつけた本番だったことも忘れるほど盛り上がりました。「こんな形もあっていいなと思った」と、大きな反響が寄せられ、つくづくやって良かった、と思いました。《演奏会》という形にこだわらなければ発想は拡がり、何かを生み出せる、確かな手応えを感じました。

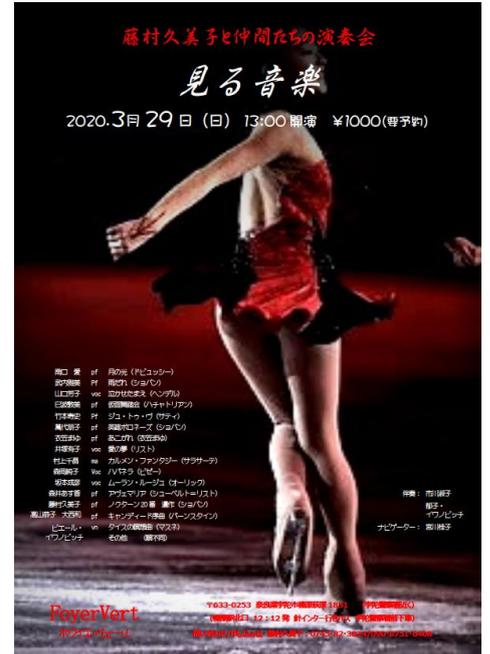
4月、開催のはずだったいろんな音楽イベントはすべて延期か中止、生の音楽に触れることが一切無いという異様な毎日が続き、形容し難い虚無感に襲われていました。そんな時、ある生徒から「先生、また公開レッスンしてください」との要望がありました。私の教室では年間2回、公開レッスンをしています。それをやろうというのです。自粛ムードに、レッスンに出てくることも憚られる重苦しい空気が張り詰めていたので、その突破口になればと、7月に行くことを決めました。

ただ、みんなの共通の取り組みとして何かテーマがあったほうがいいかなと思い、ピアノ演奏における《ペダリング》という視点に焦点を当ててみました。これが図らずも私自身のいい体験になったのです。というのは、ペダリングを云々することは必然的にピアノの楽器としての考察を必要としたからです。いろんな文献を読む必要が生じ、それに関する作品も弾いてみる必要が生じました。それは一つの演奏会を企画するのと同じぐらいエネルギーを要する作業でした。文字通りステイホームを実践したわけです。

ピアノは18世紀の初頭にイタリア人のバルトロメオ・クリストフォリがチェンバロのボディを用いてハンマーで打弦するというアイデアをとりこんだことで誕生した楽器です。そのメカニズムの精妙さは見事なもので、他に類のない楽器の王様でしょう。楽器そのものが芸術作品と言えます。この楽器を更に深く知ることができれば、ピアノをもっと美しく鳴らすということもできるかもしれないという密かな期待も生まれ、取り組みました。こうして実現した、公開レッスンという形の演奏会は、受講生5名と聴講生だけのささやかな演奏会でしたが、全員マスク、私もマスクのままマイクを使って、3時間半のレッスンをしました。

思いがけないコロナの出現で、かつての生徒からは、出口の見えないトンネルの中にいるような手紙もありました。音楽する者の喜びは共演者と絶妙に呼吸が合った瞬間、自分の演奏に耳を傾けて下さる人と音を媒体に心が通じ合っている！と感じることでしょう。ところが、こういう喜びをコロナは否定するのです。しかし、ちょっとした発想の転換、きっかけが一歩足を踏み出すチャンスになるということはこの二つの体験は教えてくれました。

8月末、異常気象の所為か昔はいっぱい居た小動物も最近はめっきり少なくなった気がします。それでも夕暮れ時には蝸の声が聞こえ、野原では赤トンボが去り行く夏を感じさせます。私たちは穏やかな心落ち着く秋を迎えることができるのでしょうか・・・。コロナによって、社会は大きく変わってしまいましたが、それは取りも直さず、私たちが試されているということだと感じています。



リアリズム～「写実」とは

南城 守

近年、日本のアートシーンで流行の「写実絵画」。すでに過去のスタイルとされてきた写実が今、衆目を集めている。かつて私は1980年代末から幾度となく写実関連の展覧会に関わり、アンドリュー・ワイエスやアントニオ・ロペス・ガルシア、野田弘志や磯江毅（グスタボ・イソエ）等の作品を調査した。あたかも時代に逆行するかのように看過され「非藝術」と揶揄された写実だが、時として見る者を圧倒する表現の強さ、その瑞々しさに、「現代アート」としての可能性を探っていたのだ。

そもそも「リアリズム（リアリズム 写実主義）」がフランス画壇に登場したのは1855年。パリ万博を記念して開催されたサロンに応募したとある画家が選外となり、怒り心頭で博覧会場前で私設パビリオンをつくり、落選作をずらりと並べて入場料を取る個展を開催したのだ。画家の名前はギュスターヴ・クールベ。冠されたタイトルは「リアリズム」。その趣旨は「私の時代の風習、思想、外観を私自身の判断によって翻訳すること、画家であるだけでなく人間であること、一言でいって生きた藝術を創り出すこと、それが私の目的である」。なんとこれは西洋美術史上初めて「有料にしてワンマンショー」でもあった。

周知のように19世紀前半のフランス美術は新古典主義やロマン主義が中心で、理想化された「神話画」や英雄崇拜の「歴史画」が主流だった。そのような伝統にあってクールベが描いたのは、厳しい現実を生きる無名の農民や労働者たちなどを主人公に「卑近」や「猥雑」とされていたもので、アカデミーの審査員たちは「イデアリズム（理想主義）」に対する「リアリズム（現実主義）」の挑戦と批判したのだ。



ギュスターヴ・クールベ
(1819 - 1877)

「天使を描くためには、天使を見なければならぬ」というクールベ。純粋に目に見えるものを描き、近代



クールベの代表作のひとつ「オルナンの埋葬」(1849)
『オルセー美術館の絵画』(中央公論社, 1993年)より

社会の矛盾に満ちた現実を大胆に描くスタイルはその後、ロシアでは「移動派」に繋がり、さらに中国の近代絵画にも受け継がれていく。社会主義的思潮がクールベの「リアリズム」と結びついていったのである。

注目すべきはクールベの革新性の内には、写真の登場によって絵画の存亡が唱えられていた困難な時代が読み取れることだ。人間は、対象物の再現は機械にはかなわない。ならばそこにはいかなるメッセージを込めるか、それが問題であり、機械にはない「イズム（主義・主張）」、これこそが

絵画が生き延びるための生命線だったのだ。（クールベは写真を活用して制作しているが）

ところで和訳である「写実」は読んで字のごとく、「実」を「写す」と書く。「実」とは何か、この問いかけが重要だろう。それは画家の人生観を通して見えてくる価値観と美意識の集積でもあり、真の実を問いかける画家の姿勢がそのまま反映する。ただ、対象を克明細緻に描くだけが写実ではない。つまり、「いかに描くか」ではなく「何を描くか」という問題意識、ここに写実の本質がある。

さて、そう考えれば冒頭で述べた昨今の写実の流行はいかなるものだろうか。私が求めたのは、アメリカ美術における60年代以降の「スーパー・リアリズム」や「ハイパーリアリズム」といった、大都市の無機的空間から生み出されたものではなく、より古典的な趣だった。画家自身が内省と内観を繰り返し有限の生を直視したメッセージ、つまり西洋美術でいう「メメント・モリ（死を忘れるな）」や「ヴァニタス（虚栄のはかなさ）」、虚飾を捨てて純粋に物が存在することの崇高さを謳い上げた写実だ。単に美しいものや超絶技巧を誇示するものでもない。彼らが見た「実」の重さを問いかけてみたかったのである。

だが、いうまでもなく写実観は百人百様。その主張は玉石混交の相に思えた。とりわけ昨今のCGや高性能画像に慣れ親しんだ若い世代の画家たちの克明細緻な「術」の世界。はたしてクールベが見たら何と言うだろうか。称賛か罵声か、それとも…。

La French Tech をご存じですか？ (HP : <https://lafrenchtech.com/fr/>) 林 薫子

皆様はじめまして。新しく奈良日仏協会に法人会員として入会しました林薫子と申します。東京の在日フランス大使館貿易投資庁に17年間勤めたのち退職し、今年6月より奈良県生駒市に移住し、日仏通訳・翻訳・コーディネーターの会社「株式会社 NARA FRANCE」を起業しました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。 <https://www.narafrance.com/>

さて皆様、「La French Tech」(ラ・フレンチテック、以下フレンチテック)という言葉をご存じでしょうか？ 一般的にフランスといえば、文化、ファッション、食、...などのイメージが強く、テクノロジーは結びつかないかもしれませんが、歴史的に、原子力、TGV など、ハイテク分野にも大変強みを持っております。しかしながら、この「フレンチテック」はいわゆる重工業のフランスのテクノロジーではなくて、「スタートアップ」(イノベーション分野で起業したばかりの会社)によって、フランスの経済、社会を活性化しようという新しいムーブメントです。

これは2013年にはじまり、フランス政府が旗振り役になって、フランスのスタートアップのエコシステムをもりあげ、フランスを「スタートアップ大国」とイメージアップするための一種のブランド戦略です。もちろん、政府も公的資金を投入しましたが、あくまでも主役は起業家やスタートアップ、それを支援する大企業や投資家、もりあげるメディアであるとして、政府は縁の下の力持ち役となりました。

フレンチテックは、フランス国内のスタートアップを活性化するだけでなく、国際的な展示会にフレンチテックのロゴマーク「赤い鶏」(右上写真参照)をつけて出展し、世界中に「フレンチテック」を認知させること、そして世界中の優れたスタートアップをフランス国内に集めることも推進しています。現マクロン大統領がデジタル経済産業大臣時代に積極的にこの経済政策にとりくみ、2015年10月の「フレンチテック東京」のローンチ時に来日し、オープニングスピーチをしました。

<https://media.dglab.com/2017/05/18-event-french-tech/>

実際私は在日フランス大使館貿易投資庁の仕事として、このフレンチテックを日本企業に紹介する業務を担当しました。フランスの製品や技術の輸入、またはフランスへの進出を計画する日本企業の間では「フレンチテック」は知られるようになりましたが、まだまだ一般的には日本での「フレンチテック」の知名度は低いと実感しております。フランスではWith コロナとなつてなお、スタートアップへの支援は続きますし、新しいテクノロジーを生み出すスタートアップに期待をしています。奈良日仏協会の皆様にも是非この機会に新しいフランスの話題として「La French Tech」を知っていただければ幸いです。

Mesdames et Messieurs, enchantée. Je m'appelle Kaoruko HAYASHI, et vient de rejoindre l'association franco-japonaise de Nara. Pendant 17 ans, j'ai travaillé à l'Ambassade de France à Tokyo et viens de déménager à Nara en juin dernier. J'ai lancé ma propre entreprise nommée NARA FRANCE pour faire de la traduction franco-japonaise et la coordination des affaires entre la France et le Japon. <https://www.narafrance.com/>

Connaissez-vous le mot de **La French Tech** (HP : <https://lafrenchtech.com/fr/>) ? En général, vous imaginez la culture, la mode, la cuisine en ce qui concerne l'image de la France, et il est difficile d'imaginer la relation entre la technologie et la France.

La French Tech, c'est le nouveau mouvement français des startups qui sont de jeunes entreprises spécialisées dans l'innovation et la technologie. Depuis 2013, l'état français soutient la promotion de la « French Tech » pour développer un écosystème startup en France et accroître la notoriété « French Tech » dans le monde entier. Comme M. Macron était très impliqué durant son mandat de ministre de l'Économie, de l'Industrie et du Numérique, il avait fait un discours lors de l'ouverture de French Tech Tokyo en octobre 2015.

<https://media.dglab.com/2017/05/18-event-french-tech/>

Dans le cadre de mon métier à l'Ambassade de France au Japon, je me suis occupée d'échanger avec la French Tech au Japon et en lien avec les entreprises japonaises. Cela a permis de faire connaître de plus en plus la French Tech, cependant, la notoriété de la French Tech au Japon est toujours insuffisante. Je serais très contente si vous pouvez découvrir la French Tech grâce à ma participation à l'AFJN. (Hayashi Kaoruko)



ラスベガスの展示会 CES のフレンチテックブースにて。ちなみに、来年1月のCESはオンラインイベントになりました。

ボルドー、シャトー訪問

柳谷 安以子

いつか行ってみたかったボルドーのシャトー訪問ですが2018年の秋、6シャトーを訪問することが出来ました。今日はその中で日本にゆかりのある『シャトー・ラグランジュ』(右下写真)をご紹介します。

メドック・サンジュリアン地区最大のシャトー。格付け3級です。ちなみに格付けというのは1855年にパリ万博にボルドーからワインを出す時に格付けしてから出した方がいい、ということで商工会議所がたった15日間で決めたものでそのままずっと変わっていません。長い歴史の間にオーナーや醸造者が変わっても格付けにふさわしいワインであり続ける努力はずっとされているとのこと。ここはサントリーが1983年に買い取り、その価格の4倍の予算で立て直し、当初は外国人が買い取ったとのことで不評でしたが、現地の人を従業員にしたことや昔の雰囲気そのままの修復したことなどで好感を持たれたシャトーです。102基のステンスタックは完全にマイコンで制御され、圧倒されます。

畑に入って3品種のぶどう(カベルネソーヴィニオン、メルロー、プチベルド)の実を試食しました。もうすぐ刈り取りですから甘い! 違いがはっきりしています。プチベルドはちょっと酸っぱくて苦いです。各シャトーのブドウのブレンド割合やコンセプトは違いますが、どこのシャトーも誇り高く凛としたたずまいを見せていました。

ボルドー最後の日にホテルから歩いて近いガロンヌ川に。ガロンヌ川はドルドーニュ川と合流してジロンド川になり、大西洋に流れて行きます。ボルドーの港湾貿易とワイン産業を支えてきたこの川は茶色です。汚染されているのではなく、とてもきれいな水なのですが、河口に位置し、海の砂が潮の満ち引きで細かい泥土を運んできては混ざるために常に茶色です。こちらでは泥土を『海のクリーム』と例えていました。

歴史と美味しいワインのボルドー。またいつか訪れたい町です。



フランス語との出会い

竹中 美穂子

奈良日仏協会のことは、放送大学奈良学習センターでお世話になっていた三野博司先生に、時々、お話をお伺いして、ずっと興味を持っていましたが、この7月に念願叶って入会をさせていただくことになりました。

私は普段は外国語とは関係がない一般事務の仕事をしています。元々、人と接するのが大好きな性格なので、2025年の大阪万博で通訳ガイドができれば...と思い、今、いくつかの外国語、日本地理、日本史の勉強をしています。私にはかなり難関ですが、フランス語圏から来日される方々のガイドもできればなんて大それた夢を抱いています。

私がそもそもフランス語に興味を持ったきっかけは、20年以上前、ラジオから流れてきた一曲のシャンソンでした。その頃、毎朝、NHKラジオ「スペイン語講座」を聴いていたのですが、ある日、スペイン語講座が始まる2分くらい前にラジオをつけると、流れていた歌に私はすっかり魅せられたのです。スペイン語講座の前はフランス語講座だったので、午後からのフランス語講座の再放送を聴き、その曲が「恋はみずいろ」(L'Amour est Bleu)であると知りました。そして、私はこの歌詞の意味がどうしても知りたくて、フランス語を勉強することにいたしました。それから、独学だったり、大学のフランス語の授業を聴講したりしながら、断続的にはありますが、現在までフランス語の学習を続けています。でも、下手の横好きなので、まったく上達しません(苦笑)。

普段、私の周りには、フランス語やフランス文化、文学に興味を持たれている方がいないため、ひとり孤独に学んでいたのですが、今回皆様のお仲間に入れていただくことができ、いっぺんに「フランス仲間」が大勢できたことを本当にうれしく思っております。これから、さまざまなアクティビティにも参加させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。



第3回美術クラブ例会 (12/12) 「美術の力—逆境の中から誕生した傑作選」

いつも延期が続いておりましたが、いよいよ装いも新たに、美術クラブ例会を開催いたします。

- ❖ 講師：南城守 (絹谷幸二天空美術館顧問・キュレーター) ❖ 日時：12月12日 (土) 15:00~16:30
- ❖ 会場：生駒セイセイビル 2F 203・204号室 ❖ 会費：会員 200円 一般 700円



「星月夜」『「ゴッホの夢」美術館』小学館より

- ❖ 定員：20名 ❖ 終了後有志による懇親会あり。
- ❖ 問合せと申込先：sugitani@kcn.jp tel:090-6322-0672 (杉谷)
- ❖ 南城講師からのメッセージ：レンブラント、ゴヤ、ゴッホ、ピカソ...
美術史に燦然と輝く17世紀から20世紀の西洋美術の巨匠たち。逆境から
生み出された彼らの「この一点！」に焦点を当て、歴史を変えた名作誕生
の秘話と真実に迫る。なお、例会後の有志による懇親会では、三密を避け
つつ、美術界の動向、人気展覧会、人気美術館のマル秘話を肴にして、
清潔に、静かに、愉快地に、一献傾けましょう。

第55回奈良日仏協会シネクラブ例会 (10/25) ロメール特集②「冬物語」(Conte d'hiver, 1992)

- ❖ 日時：2020年10月25日 (日) 13:30~17:00 ❖ 会場：生駒市セイセイビル 2階 206会議室
- ❖ プログラム：『冬物語』(Conte d'hiver, 1992年, 114分) ❖ 監督：エリック・ロメール Eric Rohmer
- ❖ 参加費：会員 100円、一般 300円 ❖ 例会終了後の懇親会は中止
- ❖ 問合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 090-8538-2300 (浅井) ❖ 映画の紹介は本誌3頁参照

《2020年度第4回理事会報告》.....事務局 日時：2020年9月17日 (木) 15:00~16:15。
 場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、高松、菌田、杉谷。議題1. 2020
 年度会員数：件数93件、うち会費納入79、未納14、再入会1、退会1。議題2. 7/16理
 事会後の活動：(7/26) 第54回日仏シネクラブ例会『海辺のポーリーヌ』、(9/5) 第146回
 フランス・アラカルト「鍛冶職人エリック・シュヴァリエさんを迎えて」。議題3. 今後
 の行事：(10/10) ガイドクラブ「聖林寺と談山神社」案内ニコラ・マイニ、(10/25) 第55
 回日仏シネクラブ例会『冬物語』、(11/23) 秋の教養講座、講師三野博司「カミュ『ペスト』
 を読む」、(12/12) 第3回美術クラブ例会、講師南城守「美術の力」。議題4. Mon Nara。
 議題5. その他：次回理事会11月19日 (木) 15:00~16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆「人皆は萩を秋と言ふ よし我れは尾花が末を秋と言ふ Tout un chacun affirme / que lespédèze fait l'automne / soit donc mais pour moi / je dirai que c'est du roseau / l'épi qui fait l'automne」(万葉集 巻10-2110、作者不詳)。意味は「人はみな萩こそが秋を告げる花と言うけれど、それなら私は尾花(薄)の穂先だって秋らしいと言おう」。☆万葉集の時代、「薄」は「尾花」と呼ばれ、萩とともに秋の風情を感じさせる植物として、私たち日本人に親しまれてきました。「一番人気」の萩もいいけれど、自分は薄が好きという感性は微笑を誘います。☆万葉集の仏語訳では、薄は« roseau » (葦)と訳されています。同じイネ科の植物ですが、葦が水辺に生えるのに対して、薄は山野に生え、両者は別物です。フランス人にとって葦は、パスカルの名句「人間は一本の葦にすぎない。自然のなかでももっとも弱いものである。だが、それは考える葦である」(Mon Nara 6月号の角田茂さんの巻頭記事参照)とともに、親しまれている植物であるのに対し、薄はあまりなじみがないからかもしれません。☆言葉や文化の翻訳には誤解がつきものですが、たとえ誤認であっても具体的なイメージのおかげで、連想が豊かに広がって想像力が養われるのは、興味深いところです。とはいえ、薄と葦はやはり別物。ちょうどいまの季節、奈良県の曽爾高原では、野原一面に広がる薄が見頃です。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2021年2月号は**1月31日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみならず**「Mon Nara」(2月、6月、10月発行)又は「Mon Nara 通信」(4月、8月、12月発行)にチラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2020年10月号 numéro294

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : http://www.afjn.jp E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司